

新
體
琵琶
歌

074674-001-8

97-319

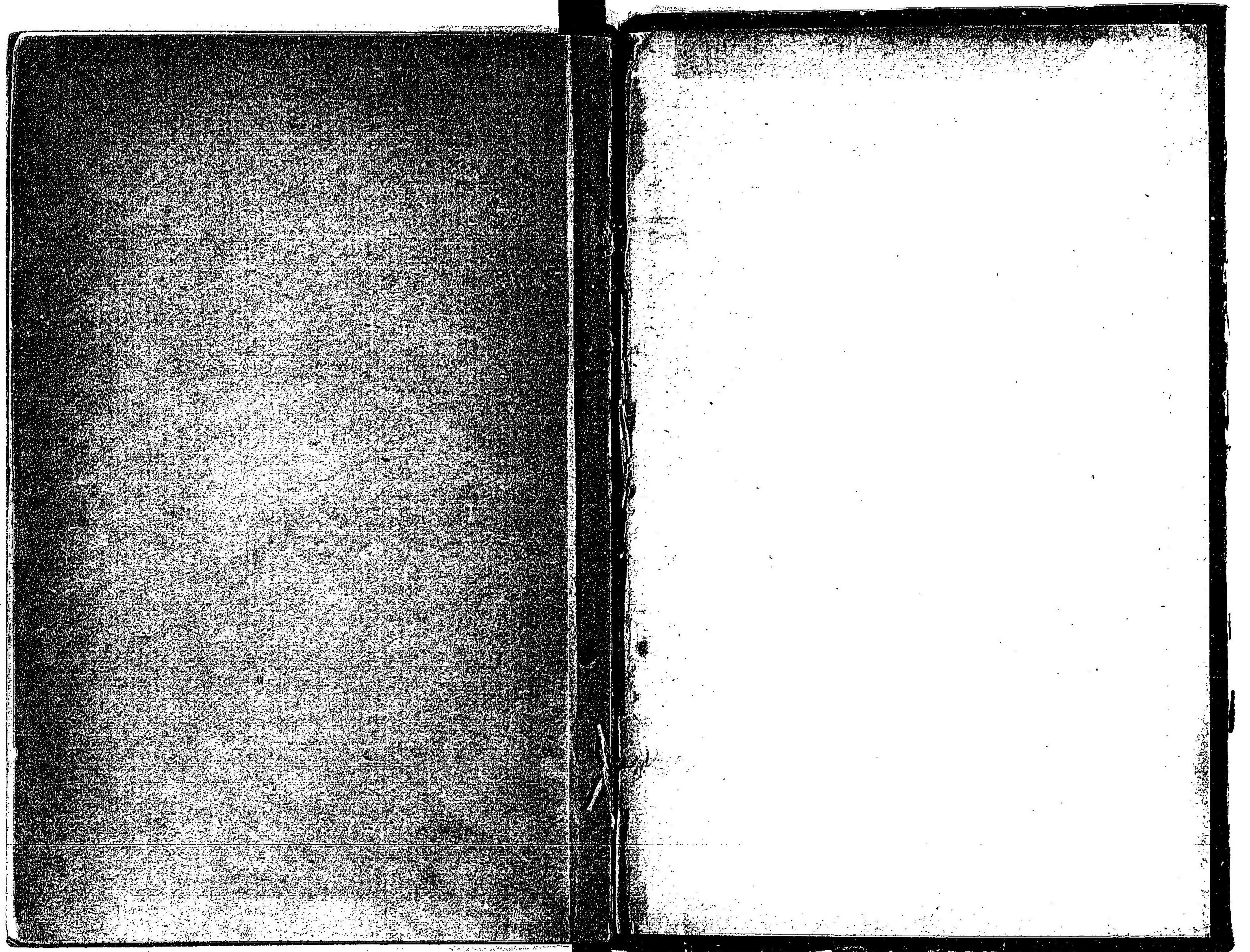
新體琵琶歌

田尻 稻次郎 / 著

M38, 39

CEJ-0187

I III III IIII



新體琵琶歌

明治
38-12-23
東京

緒言

士道の要は、忠孝節義に在り、然り而して、剛直は和を損ひ、頑硬は徳を破る、以て慈愛優雅の情なかる可らず。剛柔相和して、優美の武徳成る之を守るや約に、之を行ふや達にして、古武士の眞勇見るへきなり。澆季の世、徳性衰頹、士にして往々放僻邪恣、罪を古人に得るの虞なしとせず、豈に戒めざる可んや。夫れ士たる者の天下に處するや、能く古來の成敗を察し、能く昔日の治亂に鑑み、我武徳を發揮し、古道の清粹を振興せずんはある可らず。予韻事に疎く、文亦拙し、然るに

敢て秃筆を執り、忠義の士を云爲し、進んで人情を述べ、世を驚す所以のものは何ぞや。一片の婆心、世道人心の興廢を慮れはなり。固より大成を期するに非ず、幸にして、専門諸家の参考に資し其材料となり、延て風教の一助となるを得は、則ち我望み足る。

明治三十八年初冬

作者誌

新體琵琶歌目次

多武峰	一頁	
護王神社	五	
田村將軍	一〇	
義家	一五	
初段前	九年	一五
二段後	三年	二〇
黃瀬川の對面	二三	
正成	三〇	
初段笠置の御夢	三〇	
二段中興	三三	

三段 湊川……………三九

正行……………四四

初段 櫻井の驛……………四四

二段 生立併に勳功……………四六

三段 四條畷……………五一

帆舟の徽號……………五九

第一段 舟上山……………五九

第二段 内裏詣併に打死……………六二

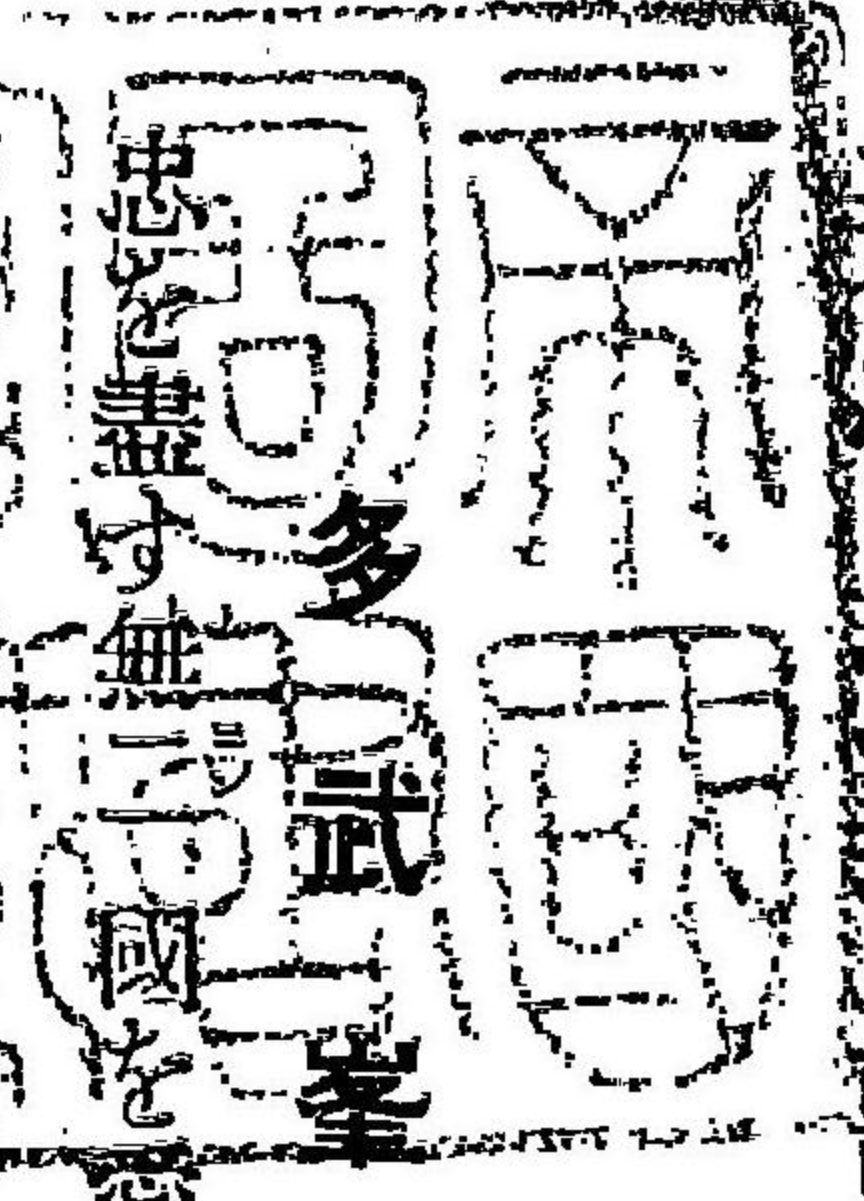
筑後川の晩節……………六六

武士の情……………七一

新體琵琶歌目次 畢

新體琵琶歌

田尻稻次郎作



忠を盡す無二の國を愛し民を撫し、深く謀り遠く慮り以て功業を無窮に傳ふるは是れ社稷の臣なり

茲に藤原内大臣大織冠鎌足は天兒屋根命の苗裔にして御食子卿の長子なり、母は大徳冠久比古卿の女にして一夜藤身より生し其蔓遍く日域に満つと夢みて孕む。生るゝの日白狐鎌を昨へて來り、前廷の藤時ならざるに咲亂れ、人皆奇異の思を爲しにけり。長するに及んで大志あり、玄鑑遠く達す。時に大臣蘇

我入鹿鬘世の餘威を藉り竊かに不規を圖り、積惡年に深く、濫吹日に増し、君臣の序を失ひ將に社稷を危ふせんとす。鎌足大に之を憂ひ慨然として匡濟の志あり。然れど蟻螂の斧を以て龍車に向ふは危ふして功なし、宗室諸王の内英邁の君を戴き共に謀を定めんと、竊かに望を中大兄に屬し、千々に心を碎さけり。時しも

皇極天皇三年辰三月法興寺に蹴鞠の御宴あり、伎を競ふ者は金章紫綬の客、節を整ふる者は鶉絃鳳管の聲。鎌足亦之に侍べり。中大兄の雄姿絶倫威ありて猛からず、進退度ありて其様彷彿ら神仙の天宮に舞ふが如きに、心中恍惚として酔へるか如く、思はず歡聲を發し、嗚呼此君を戴は、天下何と云ひ罷して傍の

人をや憚りけん、劇かに口を唸み咳に混らす一刹那、如何はしけん皇子の鞋脱けて鞠に隨て飛にけり。鎌足之を見て何にかは以て躊躇ふべき、走り進んで御鞋を拾ひ取り、雙手に捧げ跪きて皇子に奉まつる、皇子驚き禮を反して受け給ふ。是より相結ひて互に水魚の思あり。深く謀り遠く慮り韜畧神に通し、終に兇賊を斃し、以て綱常を無窮に存す、是れなん

天意回春呈萬象 六合風光應九霄

夫れ積惡の家には餘殃あり、積善の家には餘慶あり 列聖積善の餘慶豈に徴なきを得んや 皇天中大兄を降し鎌足をして之を補佐しめ、六守長して君昌へ、三寶全ふして民安し。實に子房圯上の鞋は三百の治を定め、鎌子槻下の鞋は以て五百の運

六守仁義
三曰忠
四曰信
五曰勇
六曰謀
大曰商
大曰賈

大工

を昌にす、時遙かに地異なりと雖も思ひ合して芽出度けれ、正
に是れ

簾捲清風塵不到 庭虛明月鶴來翔

然れど世事紛々人老ひ易く、生者必滅は世の例ひ 天智天皇
二年鎌足病篤し 天皇勅して其欲る所を言はしむ。鎌足奏し
て曰く

臣の不敏なる生て軍國に益なく、死して百姓を擾すを欲せ
ず、葬事願はくは儉素に従はん

と。嗚呼鳥の將に死せんとす其鳴や悲し、人の將に死せとんす
其曰や好し 天皇深く之を惜み大織冠を授け姓を藤原と召し、
永く槐門の多福を賜ふ。薨するに及んで攝津國阿威山に葬る、
後ち大和國多武峰に改葬し多武神社と崇められ靈顯殊に灼然

に天下大事あれば山嶽鳴動し、神像破烈し以て人君を戒め天
下を警醒す

幾人回首愧朝班 名高淡峯彩雲上

又見る

雲開星月浮仙殿 雨過風雷遶石壇

護王神社

夫れ信は國家の重寶にして、身體は一代の過客なり、豈に過客
を顧みて重寶を亡はん哉。忠臣危に臨みて命を致し、義士身を
忘れて節に従へは國則ち安し。茲に備前國藤野の住人和氣清
麿は其先鐸石別命より出て、時の 帝の御覺淺からず、爲人抗
直最も故事に通し、國家の重臣とは仰かれけり。如何なる禍神

の仕業にや妖僧道鏡天寵を檀にし、竊かに社稷を窺ひ、宇佐大神の御信仰殊に深きを奇果と爲し、恐れ多くも神教を矯め、私かに太宰の神官等と相結ひ、道鏡をして位に即かしめは天下太平なるとの旨神託ありしと奏聞す

天皇聞し召し、清麿を遣はし神慮の程を問はせ給ふ、清麿身を挺して之に赴く。發するに及んで道鏡眼を瞋らし劔を按し、清麿に告て曰く

汝神教を得て我欲する所を得せしめよ、然らば則ち賞は唯汝が望む所に依らん、若し夫れ然らずんば重刑に處せん耳と嗚呼淺間敷哉、道鏡身正法守護の職に在りなから、君寵を恃んで社稷を危ふせんとす。清麿之を聞き鐵腸斷へて肺肝將に碎けんとす、然れど君命默止し難く將に都を發せんとす。藤原

豐永之を聞き追て都門に到り、慨然として歎して曰く、

嗚呼何そ事の茲に至る哉、道鏡若し天位に登らば吾何の面目あつて乎彼に事えん、將に二三子と共に伯夷に従て游ん耳と、血涙數行大に之を勵ます。正に是れ

相送當門有脩竹 爲君葉々起清風

心づくしの旅の空、山轉して江亦轉し、江行て山亦行く

大君の勅と畏み旅衣 著つゝ筑紫をさして行らん

西の方都門を出る三千里、日數積りて恙なく、宇佐の郡に著にけり、心の程こそ推し量られて憐れなり。至れば則ち齋戒沐浴、身を清め、衣を改め、神宮に通夜し、眞心籠めて祈りけり。夫れ誠は天地に暢ひ神明に通す、神も納受や在ましけん、滿願の夜

の曉に、語を憑て宣はく

我國開闢以來君臣之分定矣、以臣爲君未之有也、天日嗣必
立皇胤、無道之人宜迅掃蕩宮雖同殿須異

と、大事二條にして小事一條、清麿神慮の程を畏みて、取る物も
取り敢へず都に馳せ還り、事の趣を奏しければ、道鏡按に相違
し大ひに怒り清麿を穢麿と改め大隅に流せしも、尙ほ飽き足
らず、遂に擁して密に之を除かんとす。雷雨俄かに來りて天地
暗淡咫尺を辨せず、怪しむへし何處より出にけん、野猪數千劇
かに來つて清麿を擁護す。只見る

項上刺毛衝天起 鼻端血肉向風翻

眼如弦月蹄如鐵 牙似皂角唇似盆

勢ひ殊に凄ましく面を向くへき様もなく、路傍の兎兎魂を失

して倒れ、清麿僅かに免るゝを得へり。其間實に髮を容れず、神
明の冥助あるに非ずんば、何ぞ再ひ天日を拜するを得ん、嗚呼
危ひ哉。寶龜元年 光仁天皇御即位ありて道鏡を下野に竄し、
清麿の姓名を復し都に召し給ふ、

不待他年公議出 漢廷行召賈生還

噫々孤忠孤ならず必ず隣あり、參議藤原百川其忠烈を愍み、其
封二十戸を割き之を清麿に與へけり、世傳へて以て美譚とす。
清麿稼穡の道に通し或は河攝の間に荒蕪を開き、或は和氣郡
の境を定め、以て勞逸を均ふし、或は備前に水田一百町を開き、
民草の惠の露に潤ふは今の世までも變りなく、國の寶となり
にけり。信を重し身を忘れ以て社稷に奉し、稼穡を計りて民を

安す、又經世の才に富む、古人云へるあり風塵の色を辨せずんは、何そ天地の心を知んやと、宜なる哉。時に 朝廷長岡の新都を營み十年尙ほ成らず、清鷹密かに奏し、事を遊獵に託し、葛野の地を相して以て遷都の計畫を全ふす。後に至り護王神社と崇められ、山城國高雄の山に鎮坐して、四季の祭も嚴かに、社前に集ふ遠近の、人の手向る柏手の音に答ふる山彦に籠る信は、萬世の末の末まで響くらん

綠水青山長送目 白雲芳草自知心

田村將軍

夫れ文武は國家の兩輪にして、赴々たる武夫は公侯の干城なり。茲に征夷大將軍坂上田村麿は、左京大夫苅田麿の一子にし

て、身の長け五尺八寸、胸の厚さ一尺二寸、身の重さ二百一斤、眼は蒼隼の如く、鬚髯は金線に似、端然たる熊羆の將なり

桓武 平城 嵯峨の三朝に仕へ、文武の司職に任して功績最も顯はる。時に東北路遙かにして王化未だ普からず、邊境數亂れて百姓爲に安からず朝野之を憂とす。延曆十三年蝦夷反す、大將軍大伴弟麿に節刀を賜ひ、田村麿之に従ふて功あり。二十年陸奥蝦夷復た反す 廟議田村麿を遣はして之を討たしむ。將軍慨然として歎して曰く、醜虜歷代時に涉りて邊境を侵亂し百姓を惱まし、以て社稷を煩はす、此行誓て之を殲滅し震襟を安し奉らん。然れとも勝敗は兵家の常、神明の擁護を得るに非すんは焉ぞ 功業を全ふするを得んやと。發するに臨んで清

水の觀世音に祈願し、勝を將軍地藏に禱り。都を後にし逢坂山を打越へて、矢竹心の一筋に轟き渡る勢太の橋、駒も心や勇むらん。猛き心はあら金の土に因める石山の寺を遙かに伏し拜み。神の冥助もますら夫が弓矢の道に速りつゝ、既に伊勢路の山近く、紅葉踏み分く小男鹿の鈴鹿の關に著にけり

斯くとは知らず荒夫の鬼と聞へし悪路王、八州の草木を吹き荒し、既に駿河を陥しぬれ、黒風塵埃を捲ひて鈴鹿の關へと攻め懸かる。然れど天威所攝、罔弗^ニ獸驚鳥散^ニ。陸奥に其名も高き高丸も、將軍の出征を聞き、叶はしとや思ひけん。天兵未だ關を出でざるに兵を旋して、達つ谷窟に楯籠り、攻守忽ち其勢を異にす。官軍之を追ふて賊と神樂岡に戦ふて殺傷相當り、矢已

に盡く。忽ち神童あり矢を拾ふて雙手に捧げ、之を田村麿に獻す。將軍奇異の思を爲し、謹んで受納し、都の方を伏し拜み。馬を陣頭に躍らし、つと鞍坪に伸ひ揚り、大音あげ、如何に高丸承はれ、普天の下率土の濱何れか王土に非らざらん、汝醜虜の身を以て。朝憲を蔑にし民を苦む、其罪萬死に當る、今我詔を奉し、神明の冥助を得、以て汝を征す、今世の思ひ出に此矢一つ受けて見よかしと云ひも畢らす、五人張の強弓に件の神箭打ち番ひ、きりくゝと引絞り弦音高く切て放せば、狙ひ達はす高丸が胸板に羽袋攻めて立ちにけり、何かは以て堪るへき鬼人と呼ばれし悪路王足を空にし鞍坪より眞逆様に撞と落ち、神樂岡も搖ぎけり

王師一たひ動ひて無疆を圖制し、八極を匡正して九夷を密定す、正に是れ

日オホハコシラ腰柳營春試馬 月ユキノケ明虎帳夜談兵

壺イシノヒメの石碑鮮かに「日本中央」の四大字は末の世までも傳はりて、大丈夫オホムサシの眞心は深くも鐫りて残りけり、赫耀たる功業復た何をか加えぬ。然れど又世の中は定めなきこそ定めなれ、天の原振さけ見れば照る月も満つれば關るの例ひあり、惜むへし、花木春過ぎて夏未た半はならざるに無常の風は定業オホキヨウを吹き送り、弘仁二年享年僅かに四十有二病を以て薨す。時の帝の御愛惜ウレヒ最も深く 勅して宇治の栗栖村に葬り、佩劍は之を御府オホノミヤに藏めて坂上寶劍と召し、忠魂永鎮トコシホ弓劍長藏、春露秋霜樹ツキ、茲ココ穹碑

義家

初段 前九年

夫れ萬卒は得易ふして一將は得難し、將に將たる者は更に少し。茲に入幡太郎源朝臣義家は鎮守府將軍賴義の長子にして源家五代の將軍なり。騎射神の如く、兵法に通し、三軍を率ひて誤らず。年甫めて十六父に隨ひ陸奥の兇賊安倍貞任を討ち、途オチち勿來關オホソリノセキを過く、時春にして櫻花爛熳、搖々として散りて常奥オホを分ち、東の方都門を出る二千里、長閑ナガヒラき空を打詠め
吹風を勿來の關と思へとも

道もせに散る山櫻かな

と一首の和歌を詠しつゝ、駒も勇める若緑、關の巖角踏み鳴ら

し、英姿颯爽として奥州に入る。既にして轉戦數十回、趨捷絶倫向ふ處前なく、中にも天喜五年十一月烏海の戦に官軍利あらず、雪中主從僅に七騎を殘し、賊軍掩ひ來り水も漏らさず取圍む。大將賴義傷つひて已に危し。義家縱横奮戦大鏃を放ちて頻りに強敵を斃し、奔ること迅雷の如く進むこと疾風の如く、其働き目にも留まらず、人間業とは見えさりけり。貞任之を見て歎して曰く噫々壯なる哉八幡太郎の名に負かすと、終に圍みを解て去りにけり。

古き諺に邪は正に勝たすと、宜なる哉。康平五年出羽の豪族清原光頼、同武則來りて官軍に投ず。賴義機到れりとし軍を督して貞任を攻め、連戦之に勝ち、進んで衣川の柵に迫り、之を陷し

ゐる。貞任身の長六尺有餘、腰圍七尺四寸、容貌魁偉、今は是までとや思ひけん拔山翻海の勇を振ひ、三尺八寸の鬼王丸の大太刀眞向に振り翳し、嘩と喚ひて奮進す

銀瓶乍破水漿迸 鐵騎突出刀鎗鳴

其様彷彿ら阿修羅王の荒れたるの如く、勝ち誇りたる官軍の將士支へ兼てそ見えにける。義家之を見て嗚呼物々しや、然れど復た得難きの勇士なり、我一撃以て之を懲さんと、持ちたる弓を從者に授け、源氏重代の髭切丸を抜き放ち、駒を進めて名乗り掛け一往一來虚々實々、劔花迸はしりて或時は螢火の飛か如く、或時は電光の秋天に閃くが如く、互に秘術を盡して渡り合ひ、人交せもせず切り結ぶ。然れど名將の手馴流石の貞

任終に叶はず隙を窺ひ捨て鞭打て逃出す。義家左もこそと打ち諾き太刀を收めて、五人張の強弓に十五束三伏の大矢を打番ひ、駒に帕入れ追ひ縋り、きりく〜と引絞り將に之を發せんとするの一刹那

衣の館は綻ひにけり

と聲高らかに呼ひ懸くれは、貞任駒を駐めて振り返り、莞爾と打ち笑み

年を経て糸の亂れの苦しさに

と、其上の句を附けにけり。義家之を聞き嗚呼好男子武あり文あり、若し正路を踏まば我と共に 朝家の衛たらん、我今汝か爲に一矢を弛ふせんと云ひ畢り、矢を收めて靜々と引還す。貞任不思議の命を助かり、ほつと息繼き駒を早めて走り去る。然

れど八逆の罪何そ天誅を免れんや、官軍の銳卒矛を揮ふて之を刺し墓なき最後を遂げにけり。携一則ち誅し誠歸則ち撫し、九年の亂甫めて平らく。正に是れ

虎帳十年夢 龍庭幾度霜

功を以て頼義は伊豫守に任せられ、義家は出羽守に任せらる。然れど義家は南海東山雲水渺焉、孝志の缺あるを憾みとし、狀を上り志を陳へ其心中をそ訴へけり。夫れ孝道を勸むるは治國の基たり、況んや請ふ所あるに於てをや 朝廷其志を憐み則ち越中守にそ任せらる。嗚呼忠臣は孝子の門より出つと宜なる哉、臣子の行は忠と孝とのみ、君を思ふて身を忘れ父を慕ふて封を辭す、八州の草本威風に伏す、豈に偶然ならん哉

報國報親無二道、盡忠盡孝只一心

一段 後三年

承保二年賴義病没し、尋て義家陸奥守に任せられ鎮守府將軍を兼にけり。時に二州路遙にして王化未だ遍からず、前狼後虎事復た難く、九年の亂僅に平らき、幾何もなく奥羽再び亂れ、清原武衡、同家衡反旗を翻へし、出羽の國金澤の柵に楯籠る。義家兵を發して之を攻れとも柵固ふして急に抜く能はず、時に舍弟新羅三郎義光左兵衛尉を以て京師に宿衛す。詩に曰く

鵲鴿在原兄弟急難

每有良朋況也永歎

宜なる哉骨肉の眞情深く義家の安否を打ち案し、赴き救はんと請ひしかど、廟議之を許さず、終に志を決し官を解きて馳せ

て家兄の難に赴きけり。伶人豊原時秋之に従ふ。義光數説て歸さんとす、然れとも聽かず、日數積りて足曳の足柄山に差し懸る。義光時秋の心を察して之を憐み、愛鷹山の絶頂に楯二枚を敷き、隨者を退け、雙鸞笙を吹て鳳管を整へ律呂嚶朗相和して切なり、大食入調關山の思ひ、對坐悄然秋月白し、名残は最と惜まれど躊躇ふへきに非らされは、起て秋千を踏て關の左右に別れけり。心なき身にも哀は知られけり、秋の旅路の物憂きに駒の足搔き早めつゝ、只管ら道を打ち急き縈紆たる白川千轉盡き、坦々たる平野朔風寒く、旅の衣の身に浸みて幾夕暮の宿ならん、明し暮しつ程もなく陸奥の國府へ著にけり。義家大に喜ひ不意の會合恰も先考の再生に會ふか如し、我此の良副を

得、賊首を見る將に遠きに非ざるへしと。肝膽相照し共に謀計を定め、寛治三年九月上旬入州の將士を率ひ、隊伍整々一絲不紊、金澤の柵へと攻懸る。秋高ふして馬肥へ正に是れ兵を用ゆるの時、唯が爲に玉章傳ふ雁ならん行く手の野邊を鳴渡り、忽ち羽並をぞ亂しける。義家仰き見て曰く伏あり、急に輕騎を放ちて之を求め矢を注ひて塵殺し、左右を顧みて曰く我曾て之を大江の恩師匡房に聞く、雁行の亂るゝは必らず伏ありと、今日の事一に師の賜ものなり、其教に依るに非らすんは我何そ三軍を全ふするを得んや、嗚呼危ひ哉と、滿身に顯はす武者震ひ、固睡を飲て説きければ、將士舌を卷きてそ感しけり

白旗不動兵營靜 立馬邊境看亂鴻

と賴山陽か詠せしも理りせめてぞ聞へける。

十一月金澤の柵陥り白符用ゆるを得ず、頭足地に委し分れて人の收むるなく、黃埃散漫として風腥く、將軍名を成す後三年、北海水碧にして鳥海山青く、征旗動かすして邊境空靜に、行雁亂れず、千と世を祝ふ鶴夕岡、八千代の御世の末かけて弓矢の響留めけりくくくく

黃瀨川の對面

變動止まざるは天地の大經にして盛衰常なきは古今の通理なり。去れば保元平治の大亂は端なくも源平兩家の争となり義朝都に敗れ内海に横死し、源氏の一族或は打たれ、或は捕はれ平家全盛の世となりて、免るゝ者は寥々晨星も雷ならず。時

に九男牛若は平治元年當歳の嬰子にして免れ得へくもあらはこそ、雪中母に懷かれ仇敵清盛が宅へと伴はる。死生其間實に髮を容れず、噫々危ひ哉。路呱呱として乳を呼ぶ、其聲凜乎として亂れず既に牛を呑むの勢あり。詩あり歌ふて曰く

雪灑笠檐風卷袂 呱呱索乳若爲情 他年鐵枵峰頭嶮 叱

咤三軍是此聲

母常磐姿色あり清盛之を喜び、衆議を卻け終に牛若を免し、鞍馬寺の僧覺日に託す。神彩秀發超捷人に軼ゆ、年甫めて十一歳諸家の譖を聞し、慨然として以爲く我は是れ世々の將種覆墜何そ此に至る、何如にもして怨敵平家の一族を打滅し、父祖修羅の妄念を晴し家門の恥を雪かんと天地に誓ひ、承安四年密

かに鞍馬を出て年十六歳にして、自ら加冠し九郎義經と名乗り、陸奥國の住人鎮守府將軍藤原朝臣秀衡か方に打ち潛み、靜に時の到るを待ちにけり、心の程こそ憐なれ。去程に都の方にては治承四年の春の頃、家兄賴朝義兵を擧げ、平氏と戰を交ゆる由、仄かに陸奥へ聞へければ、鬱勃たる雄心禁しかたく、竊かに出陣の用意をそなしにける。扱も又藤原朝臣秀衡は北方の雄鎮、名門の後裔、固より智勇兼備の人なれば、痛く義經の行末を打案し、暫しとこそは止めけり。左れと義經は源氏の興廢、家兄の安危此時にありと、主從僅かに十八騎平泉館を忍び出す。秀衡之を見て、今は助すば叶ふまじと、宗徒の郎徒佐藤三郎繼信、同四郎忠信をして之を追はしめ、一臂の力を添にけり、

實に武士の情の程こそ優しけれ

此方には源氏の大將兵衛佐源朝臣頼朝之を聞き、土肥次郎實平、北條四郎時政の兩人を招き、予聞く舎弟九郎には、此度我等義兵を擧しを聞き知りて、遙々奥州より馳せ登ると。最早間近に来るべし、汝等兩人參り向ひ、速かに伴ひ來るべしと、下知すれば、兩人畏り、駒の足搔き早めつゝ、つと陣門を打出て、彼方を屹と見渡せば、早一隊の人馬此方を指してそ急きける。直先なるは間違ふ方なき此手の大將、宿鶴の太く逞しく尾髪垂れるに貝鞍置きて打跨り、赤地錦の直垂に萌黄匂の腹巻し、最と鮮かに出て立ち、年齢骨柄義經に彷彿たり。斯くと見るより實平は、扇を揚て指し招き、其なる人々に物申さん、是れは

佐殿の身内、北條四郎時政、土肥次郎實平に候、御手の大將は奥の九郎殿に候はずや、佐殿の御下知を承り、是まで參り向ふて候なり、いざ、せ給へ伴ひ參らせんと、大音聲に呼はりたり。義經之を聞き、雙眼に涙を浮へ、扱は兄上の御使なるや、兩士の出て向ひ過分に存するなり、頃日御機嫌如何にと言葉急はしく問ひ懸くれば、兩人畏みて、富士川の御勝利より殊に麗はしく拜し奉る、撫や待詫ひ在すらん、いざ此方へと駒の頭を曳返し、中陣へとぞ誘ひける。頼朝之を見て思はず席を離れ、扱は牛若にて候乎、天晴成人せしものかなと、互に手に手を取り合ひて、暫し言葉もなかりけり。何時の世に誰が言ひ初にけん、言はざるは言ふに勝るの情ありと、理なる哉同胞の絶て久し

き對面に、三軍只白旗の風に颯る音のみし、鬼をも挫ぐ東武者、
鳴を鎮めて並居つゝ、鎧の袖を濕しけり

斯くては果てしと頼朝は、靜に立ちて義經を大將の座席に誘
ひ、床机の上なる熊の皮、手つから取つて與へつゝ、予不肖と
雖も清和源氏の嫡流を汲み、世の有様を見るに忍びず、驕れる
平氏を膺懲し、上は

叡慮を慰め奉り、下は萬民を塗炭に救ひ、併せて家門の耻辱を
雪がんと、義兵を擧し門出に、御身の馳せ加はれしは、源氏開
運の前兆と、八幡殿後三年の古事も思ひ出されて喜しけれ。御
身は今より源氏の將として、出ては三軍を率ひ、入ては帷幕に
參與して、兄頼朝の足らざるは補ひ給へと、最と懇に言ひ諭せ

ば。義經唯々として之を承は、粟津の一戦に兇敵を斃し、さし
も榮へし平家の一族を八島の波に打沈め、都に凱歌を奏せし
は類ひ稀なる功績と時の

帝の御叡感殊に斜ならずして、伊豫守にそ任せらる

茲に又柳營の身内に、梶原平三景時なる者あり、天性淳好の白
者にて、卑怯未練の逆鱗の論よりし、痛く義經を恨み、石橋山伏
木隠れの古事に、大將の覺淺からざるを奇貨となし、折に觸れ
つゝ、讒口をそ搆へける。如何なる禍神の祟りにや、古今獨歩
の名將も、連枝を断ちて、幹根を枯し、同根を煮て牝鷄を養ふ
の非を、悟らざりしそ疎薄けれ。臥薪嘗膽席未だ温かならざる
に、一片の讒口骨肉を割き、千軍萬馬の功勞も、綻ひ易き衣川、

後の世までも傳へ聞き、涙の種とはなりにけり、正に是れ

寶刀跨海斬鯨鯢 貝錦歸郷忽斐斐

阿兄不識肥家策 狂煮同根養牝鷄

正成

初段 笠置の御夢

國亂れて忠臣顯はれ、歳寒ふして松柏の凋むに後るゝを知る。抑保元平治の亂れより乾坤反覆王道振はず、陪臣國命を執りて天下爲めに安からず。就中鎌倉九代の執事相摸の入道崇鑑北條高時は、身禪門に在りながら、善惡邪正を辨へず、非義無道を専らとし、民草の枯るゝも知らず、日暮に、唯遊興に耽りけるこそ疎薄けれ、茲に人皇九十五代の帝 後醍醐天皇と申

し奉るは 後宇多天皇第二の皇子に渡らせられ、文保二年御即位ありて、世の有様を見そなはし、深く叡慮を悩ませられ、萬民を塗炭の中に救はんと、大御心を碎かせ給ひしそ畏こけれ。然れど高時は更に悔悟の色もなく、却て之を憂事とし聲鼓地を動かして塵煙を擧げ、錦旗葆光て日色薄く 天皇亂を大和國笠置の山に避け給ふ、行在の月は心を傷ましむるの色、夜半の猿聲轉た斷腸。噫、御傷ましひ哉九重の深き禁裏を出て給ひ、悒鬱旅の假枕、鐘鼓遅々として夜長く、星河耿々として天將に曙ならんとし、大殿油も斷へだへに、孤燈挑げ盡して思ひ悄然、夢となく現となく紫震殿の前庭に彷徨給ひ、一大樹の南枝最も榮へ、樹下に南面の御座あるを御覽し、怪しみ問んとな

し給ふ。忽ち二童子あり跪つきて 御座を指示し、泣て奏すらく方今普天の下 聖體を容るゝに所なし、唯此 御座ありて之に在すを得る耳と云ひ畢り、天に向つて飛躍し去る。是なん南柯の夢にして醒て奇異の思ひを爲し給ひ、親ら卜なはせ給ふ様、木に南を添ゆるは楠なり、焉そ知らん姓楠なる者ありて出でて王事に勤め以て回天の功を奏するあらんを。乃ち山僧快元を召して攝河泉近畿の武士に楠を氏とする者あらん速かに其有無を陣せよとの 勅諭ありければ、快元謹みて金剛山の西に楠正成なる者あり。橘朝臣左大臣諸兄の後裔にして、父を正康と云ひ、宅南に楠の大樹ありて以て氏とす。心事忠實にして民を憐み、智勇兼備の武士に候と、答へ奉りければ 天皇

御喜ひ斜めならすして宣はく巴溪水斷へす、則ち知る 烈聖在天の靈朕か不遇を憐み此良を降し給ふを、急き召出すへしとの御諭にて、藤原藤房をして正成を徴し給ふ。正成則ち 勅を奉し一族を糾合し、義兵を擧げて赤坂城に楯籠る。既にして行在急あり 車駕西狩して所在の官軍盡く解け、外一甲の援けなく、内僅かに數日の糧を殘し孤城保ち難く、一夜火を放ちて城を焼き、陽はり死して金剛山に匿れ、靜かに時の至るを待ちにけり。斯くとは知らず、賊軍は正成眞に死せりと爲し、湯淺定佛を留めて赤坂に籠め、笠置金剛を後にし東に旋へり、京畿暫らく小康をそ得たりけり

二段 中興

去る程に鎌倉には 車駕西狩、正成既に死し今は心安しと、高時の亂行日に増長し、心ある輩は密かに爪弾きをぞ爲しにける。斯る所に元弘二年の春の頃、大塔宮兵部卿護良親王兵を擧げて吉野に楯て籠り、近畿の官軍をそ召し給ふ。春雷一たび動て蟄蟲萌蘇し、錦旗光を添へて宿雪紅なり。正成時至れりとし金剛山を出て、赤坂を攻めて定佛を降し、勢に乗して和泉河内を徇へ、六波羅の賊軍と戦ふて屢之を破り、兵を進めて攝津國渡邊橋に屯し、天王寺に詣て、寺僧に請ふて傳ふる所の上宮太子の未來記を拜觀す。其文に曰く

當人王九十五代、天下ヒトノミダヒニシラ一亂而主不安、此時東魚來吞四海、日没ヒトツク西天ヒトツク二百七十餘日、西鳥來食東魚、海內歸一。

正成喜て曰く是れ諸國の官軍大に起り高時滅ひて 皇運開くるの兆なり、其二百七十餘日は將に明年の春にあり、此時 天皇遷幸ありて天下反正し、海内一に歸すること疑ある可らずと。即ち將士に示して此趣を説きければ、傳へ聞くもの隨喜の涙に咽び、將士感奮して士氣大に加はり、勢彌々張り城を千劔破に築きて自ら之を守り、裨將平野將監を遣はして赤坂を守らしむ。高時大に驚き官軍將に萌芽を發せんとす、幹根未だ成らざるに先だち、須らく之を剪除すへしと、大擧して吉野赤坂等の諸城を取り圍む

甲光向月金鱗開 角聲滿天秋色裏

正成固く守つて動かす、智略張良孔明を欺き、勇は項羽樊噲を

凌き、曩には陽はり死して賊を退け、今や逸を以て勞を待ち、關
 東の精銳を盡して之を千劔破城下に集め、以て鎌倉を空ふし、
 中興の諸將をして關東を攻めしめ、乾を旋らし坤を轉して
 龍馭を回す。五風十雨の千代の春、四海浪靜かにして詔書稀れ
 に、曉風殘月華清に入り、三條九陌簪纓新なり。然れど變動常な
 きは世の例ひ春過ぎ夏は滿枝ミツギさし、杜鵑血に啼く五月雨に、歲
 月競流晝夜不息、輕羅小扇飛螢を撲ち、振りさけ見れば天の
 原、照る月影も滿ち闕けて、秋をことづる蟬の聲、目にはさやか
 に見えねども驚かれぬる風の音、東の空に雲騒き、鎌倉山の月
 隠れ、暮行く秋ぞ惜まるゝ、

冬十一月高氏反して兵を東國に擧ぐ 天皇宸怒ましまし節刀

を左中將義貞に賜ふ。正成歎して曰く嗚呼復た一高時を生す
 と、則ち自ら奮つて行かんと請ふこと三兩回、終に許されず。
 既にして官軍戦ひ利あらず、賊長驅して闕を犯し 車駕山に
 幸ヨして天下復た亂る。正成大に憂ひ屢々奇計を設けて賊を苦
 しめ、終に之を破り高氏を西國に走らせ、再ひ回天の功を奏
 しける。明年高氏西國の賊軍を驅り集め、捲土重來大擧して來
 り犯す、注進櫛の齒を引くか如く、上下再ひ震動す。正成策を
 獻すれとも終に容れられず、天を仰いて長歎し、長袖好く舞ふ
 も何そ兵を知んや、前門に虎を防ぎ後門に狼を進む嗚呼危ヒ
 かな、是より海内復た亂れ 天步安からざるは鏡に懸けて見
 る如し、止んぬる哉策容れられずして功成らず、一死以て君恩

に報せん而已と、則ち死を決し兵庫を指して進發す。途櫻井の驛に至り、伴ひ來りし嫡子正行に恩賜の名劔菊作の一刀と、楠家の相傳に自ら工夫を加へたる一卷の秘書を授け、遺訓して河内に還らしめ、今は心易しと弟正季、一族和田正遠、橋本正員等、屈竟の勇將猛卒五百餘騎を従へ、旗鼓堂々進んで湊川に陣す。明日を限りの此の世とは思ひ定めしことなれと、流石に名殘惜まれて、弟正季を伴ひ廣巖寺に詣て明極禪師に謁し問ふて曰く

死生交謝世如何

禪師答て曰く

兩頭俱截斷 一劔倚天寒

と、正成大に悟り唯々として退き、令を三軍に傳へ靜かに其夜の明くるを待にけり、心の程こそ憐れにも雄々しくも亦不敵なれ

三段 湊川

明くれは延元元年五月二十五日賊將高氏兵を水陸兩軍に分ち、潮の如く掩ひ來りて挑戰す。義貞は和田の岬に陣し水軍を禦き、正成は賊の陸軍に當り、目に餘る大軍を物ともせず。縦横奮撃勢ひ猛虎の群羊に入る如く、賊軍披き靡き右往左往に亂れ立つ。中にも帶刀正季は如何にもして賊將直義と引組み、刺交へて打死せんと、袖印拐くくり捨て、兜を脱き大童子となり、亂軍に紛れ入り是所を彼所と驅せ回り、眼を八方に配り、ちら

と認めし引兩の前立物、天の與へと打喜ひ、駒を早めて進みよ
り、珍らしや直義正季是れにありいざ見參せんと、當麻の國行
が鍛へたる三尺八寸の大太刀眞向に振り翳し、微塵になれと
撃ち懸る。鈍耀ひて勢ひ百雷の落つるか如く面を向へき様も
なく、直義戰慄捨鞭打つて逃出す。何所迄もと追結めて閃電一
揮一刀兩斷せんとするの刹那、藥師寺左衛門尉に遮きられ
是所に長蛇を逸せしは惜むに餘ることそかし。切り結ふ太刀
の下こそ産室なれ、驚直進前、無死無生、昨夜日佛之を説き今
哉正季之を行ふ、一念萬年凝て七世滅賊の語となる。性智大勇、
無缺無餘、正に是れ脚跟下一塵不立活卓々たり

此の日卯の上刻より酉の下刻に至るの戦ひに敵を打つこと數

日佛は明極
禪師の別號

知れず、屍は積みて山をなし、血は河水を染めて瀧田の川の唐
錦、思はぬ秋の夕暮を目前にぞ現出せり。然れど味方も金石に
非されば、數刻の戦ひに打死漸次に増り行き、僅かに五十餘人
を残し、大將正成身十一創を被り、相従ふ將士薄手重手五ヶ所
十ヶ所負はぬ者としてなかりけり。正成今は是れまでと路傍の
民家に馳せ入り、近従の一人竹童丸を河内に歸へし、心靜に最
後の用意をなしにけり。正に是れ

萬恨千悲有、驚然 誰識今夜入、黃泉

故園更莫、灑愁淚 屍曝戰場唯是天

高氏之を見て誘き出たし引包んで打取らんとや思ひけん、使
を遣はし言はしむる様

我卿と怨恨あるに非ず、何ぞ追窮ツイセウを事とせん、宜しく兵を河内に退くへし、我卿か爲めに道を開かん

と、正成應せず、莞爾と打笑み答ふる様

大丈夫功ならば名を竹帛に垂れん、成らすんは血郊野を濕さん、今兵破れ戦ひ勞る死して 天恩を報するの時なり、一家人をして郷に歸らしむ、道路恙なきは是れ卿か惠みなりと、弟正季を顧み

今日死を九泉に送る知らず、汝何れの所にか魂を託せんや

正季笑て曰く

唯願くは人間に七生して此賊を滅ぼさん

正成曰く

善哉是れ我心を得たり

と云ひ畢りて刺交へ、同じ枕に撞と伏し、尙ほも頭カウベを東の方に向けたるは類タガひ稀なる忠臣と、歎と味方の分ちなく鎧の袖をそ濕しける。死生有命成敗有時とは云ひながら、諸葛武侯の五丈原の憾も斯くやとそ思ひ合して憐れなれ。又之を鎌足に比し大節彪炳として日月と併ひ懸り、綱常を無窮に存するは未だ其孰れか勝るを知らざるなり。一門闔族王に勤め、國に徇ひ嗚呼忠臣楠氏の墓は千載不朽に傳はりて湊川神社と崇められ、幣ハタテの手向の斷間タマヒなく社前シヤマヘに響く柏手は四方の海邊に鳴り渡り、國士無雙と稱へられ國士無雙と稱へらる

正行

初段、櫻井の驛

青葉繁れる櫻井の、驛の此方に駒駐て、世の往末を熟くづくと、忠義無雙の正成は思ひ溢るる熱涙を、鎧の袖に打ち灑ぎ。伴ひ來りし嫡子正行を膝元近く招き寄せ、此度の戦ひ、萬に一も味方勝利あるべしとは思はれず、今父子諸共に打死せば、左中將如何に勇なりとて、世は高氏の儘となり、飽まで叡慮惱まし奉らんは鏡に掛て見る如し。汝は今より河内に歸り、残し置きたる老臣恩地左近を謀師とし、忠義に凝りたる郎徒の子弟を憐み慈み、寇なす敵を打攘ひ、叡慮慰め奉れ、叡慮安し奉れと、忠義に恩愛を籠めたる教訓に、正行暫し言葉もなかりけり。何時

まで斯くてあるべきぞ、堰來る涙打ち掃ひ、這は情なき御詫かな、故郷には弟正時、正儀も候て、防戦に事缺くことも候はじ、是まで御供仕りし某に、今に至りて御暇とはと。僅に半を言罷して、再び涙に咽びげり、理切て憐なり。正成之を見て、心弱くては叶はじと、満身に顯はず武者震ひ、碯と呪まへ、如何に正行、汝は生れて既に十一歳、父が子なれば流石にも、忠義の道は豫て知ると、思ひき哉今日の振舞、末頼母しからぬ心底かな。父が教訓用ひぬとなら、七世までの勘當と、言葉鋭く云ひ放てば。正行今は力なく、唯々として父が授くる一卷の書、恭しく押し頂き、互に見返る、父と子の是ぞ最後の別れなり。嗚呼世の中に親子の別れほど情なきものは無りけり、況や忠

義無雙の楠公父子の場合に於ておや。弓矢取る身は義の爲めに、免れ難き事なれと、哀れは誰か忍ぶらん。三軍爲めに寂として聲なく、併居る將士鎧の袖を濕さぬ者ぞなかりける。されば異國人の詠詩にも

感極まりて呼吸熄み、思沈んでは吾を忘る

とかや、又後に至りて

取も憂し取ねば者の數ならめ

捨へきものは弓矢なりけり

と薬師寺左衛門尉が歌ひしも、是等の事をやおもひけん、嗚呼千載の下、永く臣子の龜鑑なれ、永く臣子の龜鑑なり

二段 生立併に勳功

扱ても正行は餘儀なき父の教訓に、惜々と河内に立歸へり、有し事ども母上と談り合ひ、互に袖をそ絞りける。斯る所に高氏は執拗くも、楠氏の遺族を謀らんと、正成兄弟の首級を求め態と禮を厚ふして、之を河内に送りければ。親族眷族は云ふに及ばず、將士從卒の末に至るまで、最とゞ歎をますかがみ、面を擧ぐる者ぞなき。中にも正行は悲歎の情に堪へ兼て、靈前に額付き、幼心の一筋に、只管ら父を慕ひつゝ、腹搔き切らんと爲しにけり

茲に正成の後室、滋子の方と聞へしは、萬里小路宣房卿の息女にて、藤房卿の妹君に當られと、當時故ありて家臣上田兵庫に養はれ、正中二年春の比、楠氏にこそは嫁かれける。固より名

今度軍人差
下し候事
非別儀我
等最後近
と見候に
願くは貴殿
成長の器量
見届度候得
共處更に難
も近候に難
勤學無志
成長の後
我等心中可
言也、恐々謹

門カドの苗裔、貞節忠愛の情に缺るなく、才德兼備の女性メノコノメなれば、
正行の素振ソヅリを心元となく思はれて、密かに物影より窺はる。果
せる哉此振舞マユひ、轉マユぶが如くに走出て、涙をさへに拂ひ得ず、短
刀持ちたる其手に取り継り。這は物に狂はせ給ふものかや、櫻
井の驛の御遺訓ミコノノコトよも御忘れは候まし、又隼人差し遣はされし、
其砌り、愈々勤學怠りなく、成長の後、我等心底察せらるべしと
は、仰せられすや。嗚呼無情哉ナクサナクサ、御遺訓尚ほ新たなるに、今日コンニチ
の振舞マユひ、不忠とや云はん、不孝とや云はん、物に例へん様もな
し。且つや高氏が此度の振舞マユひ、心に落ちぬ節もあり、陽に情サマシ
を銜ウケひつゝ、陰に當家を謀るの心なしとは申されず、彼れもし
御身が腹撥き切つて相果てられしを聞きしなば、謀り得たり

と喜はん、努め過りなし給ふなど。且つ泣き、且つ嘆し、慈母の
愛情に男子も及はぬ推量を搗て加へし教訓に、正行反す言葉
もあらま弓、張し心も引き緩み、放すとなしに、いつしかと、
持し短刀取り落し、唯潜々と泣にけり。是より父の遺訓と、母
の教戒身に泌みて、只管ら文武の道をそ勵みけり。實に梅檀は
二葉より香はしく、鸞鼻自から別ありと、云ふも中々愚かなれ、
云ふも中々愚かなれ

白駒の影に關もなく、早延元三年の春となり、正行十五歳にし
て加冠し、帯刀檢非違使左衛門尉を拜し、河内守をそ兼ねにけ
る。去るほとに都の方にては、逆臣高氏警醜、群邪比周し、中に
も執事高師直は饗養放横、化を傷り民を虐げ、曲事多き其中に、

畏多くも吉野の行宮マシキヤウに仕へまつれる辨の内侍に懸想して、言を巧みに誘ひて、奪ひ去らんと爲しにけり。内侍怖れ戰きて氣も魂も身に添はず。我を忘れて輿中に悲鳴ナガ聲外に漏る。折好くも正行參朝の路邊ミチノヘに、異しき聞きて馳せ向ひ、斯くと見より師直が附けし警護の侍を、只一蹴りに蹴散して、無難ナンナ内侍を取返し、其趣を聞へ上げれば

天皇御感斜ならず則ち内侍を正行へ賜はりけり。然れど正行は思ひ極めしことあれば

迎も世ナカに存在ソラふべくもあらぬ身の 假の契を如何て結ばんと一首の歌を讀み添へて固くも辭ハジひ奉り、内侍を行宮へ送還す。

雪中梅萼含香節 造化有情知者鮮

扱も正行は今や年方トシに壯にして雄心落々屢々兵を出して足利の軍を破り、攝津の國中島、伊丹、豊島等の要所を取り切り、數箇所カに砦を搆へ兵を籠めて川尻を差し塞き、西國の通路を斷ちて京勢を苦しめ、威勢を近畿に振ひければ

叡感斜ならずして、正平二年正行を四品左衛門督に進められ、昇殿をぞ許されける。正行君恩の辱ハきに感泣し、益々忠勤を勵み、山色新に動いて容光を變し。南風競ふて花復た紅ひに 聖運將に開けんとす。高氏憂懼措く能はず正平三年十二月執事高師直に六萬の大軍を授け、大舉して河内に攻め入らしむ

三段 四條畷

去る程に正行は賊軍大舉して來り犯すを聞き豫て期したることなれば、弟正時、一族和田賢秀等決死の將士百四十餘人を引率し吉野の行宮フシノミヤに詣て傳奏マツルに就き

臣が父正成微力を以て強賊を夷け、以て 宸憂を安し奉れり、然れとも幾もなくして天下復た亂れ、逆徒來襲、終に命を港川に致す。臣時に年十一歳遺訓を受けて河内に還り、將士を糾合し朝敵を除滅し、以て再ひ宇内を 皇化に歸せしめんとす而して臣今年正に壯なり、今にして戦はず、不測の病に罹らは、上は不忠の臣となり、下は不孝の子とならん。今賊大舉して來り犯す、是れ臣が命を致すの時なり、臣が死生シノセキ今日コノヒに決す、願くは

天顔を拜し以て行くを得ん

と、御暇乞申上げ潛然として泣下ナミダす。理なる哉忠孝の切なき情に迫りては、先つものば涙なり

天皇聞し召し傳奏の執奏を袞せ給はず、御簾を掲げ近く正行を召され 勅して宣はく汝か父正成常に寡を以て衆に勝ち。中興の功績最も大ひなり、今又朕が股肱とする所の者は汝一人のみ。曩リヤウシヤウの兩捷甚だ朕が意を慰す、軍若し利あらずとも謹んで命を致す勿れ

と。正行頓首して退き、衆を率ひて先帝の御廟を拜し、告げて曰さくは

戦利あらざるが如し、臣敢て生還を期せず

と。乃ち如意輪堂の御扉に、矢の根を以て

返へらしと豫て思へば梓弓

なきかずにいる名をぞと、おる

と。一首の和歌を鐫りつけて、譬截て佛殿に納め、致命記名、四條畷を指して進發す

今ははや顧みなくて大君の 醜シノヒの御楯と出や立らん

敵の方には、高師直兵を四分し、伊駒山の南、飯盛山、外山、四條畷の四箇所に陣し、陰に設けて、陽に備へ鳥雲の陣をぞ布にける。官軍の別隊四條中納言隆資卿 勅を奉し、民兵三千を率ひて、陽に飯盛山に向ひ、敵軍を牽掣す。正行は貔貅三千餘騎を引率し、四條畷より押し進む

撃鼓其磔 踊躍用兵

斯くと見るより、飯盛の敵軍兵を分ちて來り迫る。楠軍の先鋒迎へ戦ふて之を破り大に呼て殺到す。後軍は畷の敵と戦ふて殺傷相當り、矢叫ひの聲、打物の響き凄まじく、鏢を削り鏑を破り追つ返へしつ、何時果つへくとも見ふざりけり。飯山伊駒の敵軍之を見て、今は援けすは叶ふままと掩ひ來りて引包み、新ヒツツ手を入れ更へ揉み立つれば衆寡敵せず後軍終に敗走す。正行顧みず、手兵三百を提げ、奮撃突進、大に師直が軍を敗る。然れど味方の死傷も少からず、馬亦傷きて物の用に立ち難く、全軍徒立カマシとはなりにけり

時正に午に近く、乃ち壘に據りて座食し、食し畢はりて復た進

む。決死の勇兵銳氣益加わり、接戦愈劇しく、大に呼んで肉薄す。時に敵中上山元高なるものあり、主の大事と驅隔て、大將の甲冑を著し。僞はりて師直と稱し奮戦以て打死す。正行大に喜び其首を空中に擲擧げ手承して數回之を翻弄す。既にして其僞りを知り、奮然とし鬚擻んで大地に投げ付け、咄つ汝は上山元高なる者乎、無雙の朝敵其罪許し難し、然れども勇は即ち愛すべし、我汝が首を委棄するに忍びずと、袖印引裂き覆ひ裏みて之を壘上に置きにけり。實に武士の情ある振舞と、敵も味方も傳へ聞き讚めぬ者こそなかりけり

此日の戦ひ前後卅餘合、死傷野に滿ち光景凄愴主從僅に五十餘人を餘しけり。然れど餘勇侮り難くや思ひけん、近寄る敵も

あらばこそ、只遠卷に犇めけり。楠軍亦馬に離れ、敵を追ふに便なく、則ち佯り走て誘へは謀計とは白浪の寄するが如くに追つ懸る。楠家の勇士思ふが儘に引き寄せて、敵の釘き兜の鍔總角の金物に二つ三つ四つ觸る比、時分は好しと振り返へり。嘩つと喚ひて奮撃し、瞬く暇に五十餘人を斬り倒し、餘勇を鼓して突進す。敵兵開き靡き、打物業にては叶はしと、遠卷きに取圍み、残る箠の數盡し矢禰作て射懸けり。飛箭蝨の如く敵の弓勢さして強きにあらねども、辰より申に至るの戦ひに著更る暇もあらばこそ、終日著煖めたる物具に、立ち所の矢、孰れも篋深に裏洞けば、主從矢を負ふこと箠の毛の如く、嗚呼無慘なる哉全軍立ち疎赤に染みてぞ見えにける。此時に當りて天

地も正行の爲に震怒し、戰士も正行の爲に血を飲む、中にも正時は膝口強かに射洞させ立も叶はぬ風情なり。正行之を見威を振ふて大喝し、今は是までなり。雜兵の手に罹り耻を戰場に曝すなど、吉野の方を伏し拜み正時を顧み、莞爾と打笑みいざ九泉に父上を拜せんと、兄弟手に手を取り刺し交へてぞ斃れけり。時に正平四年正月五日春とは言へど空寒く、壯烈霜の如く英風義氣今に至りて霄壤に充塞す。世遙に地異なりと雖も之を諸葛武侯に比し王道を垂亡に護り、大節を無窮に存するは符節を合するが如くなり。況んや公の如きは忠孝兩なから全く、四條畷に宮桂太くも建ちて灼然に、別格官幣社と崇められ、四季の祭の斷へ間なく國を護るの神そとは社前に聳ゆ楠

の枝の繁みに知られけり、枝の繁みに知られけり

帆船の徽號

第一段 舟上山

東海の大魚黒波を捲き六龍西に幸して海漫々。茲に伯耆國の住人名和又太郎長年は忝けなくも

村上天皇の皇子具平親王の苗裔、父を行高と云ひ世々伯耆の豪族にして、曾祖行秋は承久の役王に勤めて功あり。將門自ら種あり、長年人と爲り勇健善く射る。資産饒贍にして宗族彊盛なり。元弘三年 天皇隱岐に在し、弟行氏衛中に在りて密かに勅を奉じ長年を説かんとす。未だ發せざるに當り 帝左近衛少將源忠顯等を従へ伯耆に潜幸ましく、倫旨を降して宣は

朕隱岐より至り將に卿に倚賴せんとす、卿若し詔を奉せず
んば速かに鎌倉に報すべし

と、長年流涕復奏して曰く

天子託するに大事を以てす、臣何そ之を辭せん哉、敢て微力
を盡し以て之に報せん

と、即ち宗族を糾合し、帝を奉して舟上山に登り、險に據りて
賊を防かんとす。此日、天皇御疲れ甚しく將に明日を待つて
舟上に幸せんとす、長年諫め奉り此地賊に近し、速かに進まづ
んば其乗する所となり大事去らん

陛下亦自ら奮ひ給はずんば何を以てか海内を蕩平せんと。乃

ち戎衣の上に、帝を負ひ奉り、險を犯して舟上山に登りけり。
果せる哉明日賊將佐佐木清高、同昌綱等兵三千を率ひて來り
攻む。長年從兵僅かに百五十人、則ち疑兵を作り近國將士の旗
號を製して之を樹間に建て、兵を伏せ射手を出して亂射雨注
し、自ら射て賊將昌綱を斃し、靜かに其日の暮るゝを待ちにけ
り。日昏雷雨驟に至り暗澹として咫尺を辨ぜず、衆之に乗じて
大に呼んで突進す。賊軍爲めに崩潰して死傷谷を填め、清高僅
かに身を以て免る。是に於て兵勢稍やく張り、威近國に振ひ、
將士招かずして來り集まる。長年勢に乗じ長子義高等を遣は
して京師を收復す

天皇御感斜ならず、勅して宣はく

朕の隱岐を出る舟なくんば何を以て海を濟るを得ん、卿なくんば何を以てか賊を破らん、而して地名又船上卿其れ舟を以て徽號と爲すべし

と、乃ち帆舟を親畫して之を長年に賜はりけり。長年感奮拜謝し則ち以て家紋と爲し、帆舟の徽號天下に顯はる。既にして京師平定、勤王の諸將簇り興りて逆臣頭を授け、聖運茲に開けて帝遷闕す、長年供奉帶劍以て侍衛す、正に是れ

九天雨露酬鴻業 百萬貔貅衛鳳城

第二段 内裏詣併に打死

幾莫もなく高氏反して兵を東國に擧ぐ、義貞 勅を奉して東征し、長年は正成等と共に京師に留衛す。延元元年賊軍闕を犯

すに方り、兵二千を率ひて勢多を扼す。既にして官軍戦ひ利あらず 車駕延曆寺に幸するを聞き、慨然として以爲らく直に馳せて行在を衛らんと、然れども一片の丹心禁しかたく、一先つ 内裏の模様を拜せんと、見兵三百を率ひ馳て京師に還る。賊帆舟の徽號を見て好き敵ござんなれ、我れ打ち取りて高名せんと、四方より簇り集り遮ぎり留めんと犇めけと、長年事ともせず、轉戦十七回盡く之を破り、馳て禁門に至れば黒風白雨全都に満ち 車駕山に幸して宮闕無人、簪纓滿地、曠昔の恨、獨り階前に櫻橘の樹つあるのみ。鐵腸將に斷んとして涙泉の如く、去んと欲して去る能はず、天を仰ひて長歎するもの良久し。斯くては果てしと、足曳の比叡の山を仰き見て 天子山に在

し、諸將尚ほ存す、是れ人臣命を致すの時に非ざるなり、速か
 に行在に詣て共に謀りて再ひ 君を禁闕に遷し奉らんと、駒
 の頭を引き返へし行在へとは急きけり、心の程こそ健氣なれ。
 斯くて長年は憾慨の情身に徹し、骨に浸み、一層忠勤を抽て新
 田楠等の諸將と力を戮せ賊を撃て數之を破り、終に高氏を西
 國に走らせ 車駕を護りて京師に凱旋す。嗚呼忠臣三つあれ
 は國亡ひすと、宜なる哉、帆船の徽號は菊水、中黒と并び建ち、天
 下の三旗と稱へられ 君の御覺へ淺からず、身は一草三木の
 一と數へられ、路次に犬打つ童子まで知らぬ者こそなかりけ
 り。然れと變動止ますして盛衰常なきは世の例ナライ滿開の花既に
 地に委し、逆臣高氏西國の兵を驅り催し捲土重來、官軍兵庫に

破れ、正成戰没し 車駕再ひ山に幸し、終に事の成らざるを知
 り、從弟信貞等を從へ手兵二百餘騎を提げ、進んで大宮の街に
 致り縱横奮撃力闘し死す、詩あり歌ふて曰く

狂風捲 雨夜冥々 天暗時看鬼火青

斯處幾人埋白骨 血痕露草至今腥

惜むへし大厦の覆へる 一木豈に能く支えんや、虎は死して皮
 を留め、忠臣節に斃れて名萬世に馨はし 帝曾て舟上に在す
 ととき長年の功を稱して宣はく

朕卿が忠を萬世に垂示せんとす、子孫正直以て國に報する
 を忘るゝ勿れ

と、子孫則ち遺訓を受け三子義高、基長、高光を初めとし、宗族

皆王に勤め國に徇ひ以て臣節を全ふす、壯烈霜の如く餘香梅
花に似たり、去れは古歌にも

大丈夫は名をし立つへし後の世に

開き繼ぐ人語りつぐがね

嗚呼 聖代の餘澤は以て枯骨を濕をし、名和の神社と崇めら
れ、長世臣子の龜鑑と稱へられ、千歳烈士の規矩と仰かるゝ
くく

筑後川の晩節

海行かば水
流屍
山行かば草
むす屍

みよし野の月は朧に打霞み、南枝花未だ咲かざるに北風塵埃
を卷て、如意法輪の影暗く、菊水中黒の旗の手も濕り勝ちなる
色見せて、天運時に拙なきや、建武中興の功臣も、野邊に草蒸

大君の
へにこそ死
なめ願みは
せじ
「へにこそ」
は「爲にこそ」
なり

す屍の積み重なれる歳月に、曉近き天つ空、星の數々斷へく
に、消行く様そ是非なけれ

斯かる中にも君が爲め心つくしのあつさ弓、矢竹心の一筋に、
父兄の業を墜さしと、心も赤き火の國の、菊池肥後守武光は累
世の餘勢を蓄ひ、菊地飽詔の兩郡に立て籠り、竊かに中原をそ
窺ける。吉野の 天皇聞し召し、忝なくも第一の皇弟懷良親王
を遣はされ、鎮西の官軍をそ召されける。武光 叡慮の程を畏
みて日夜軍備に怠りなく、明の使を却けて、我日本の光榮を入
島の外に輝かし、勢ひ雄々敷そ見えにけり。正に是れ

雄心志四海 高步覽九州

足利三代の將軍源義満心私かに安からず、畿内中國の軍兵を

驅催し、自ら將として九州指して打立けり。

此事筑紫に聞へければ、豪氣の武光呵々と打笑ひ、好哉來ぬるものかな、此方より攻登り、細首引抜き捨んと思ひしに、彼方より來ぬること、天の冥助に外ならず。いて目に物見せ吳んつと、屈竟の勇將猛卒八千を選び勝り、流れも早き筑後川、颯と計りに、打渡り、恰も洪水の堤を切りし勢にて敵陣指してぞ攻懸る

大將武光其日の出立には青地錦の直垂に、黒革威の鎧著て、鹿毛なる馬の太く逞ましきに具鞍置て打跨り。つと鞍坪に伸ひ揚り、大音揚げ、天下の爲には朝敵、家の爲には父兄の讐敵、俱に天を戴く可らず、有無の合戦今日を措て將た何れの日をや

期すへきそ、進めや者共と、延壽の國村か鍛へたる二尺八寸の大太刀眞向に振り翳し、簇かる敵中に破て入り、當るを幸ひ縦横無礙に切り靡け、最とも手痛く戦ふ有様、髣髴ら阿修羅王の荒れたるか如く、面に眞朱を濯き、目皆裂け、矢を負ふこと篋の毛の如く、馬斃れ兜破れ大童子となりて降立ちけり。されと勇氣少しも弛まず、英氣益加はり、双向ふ騎馬武者斬て落し、兜を取り馬を奪ふて打跨り、敵將目懸て進み寄る。敵の中にも耻を知る輩は、此處を先途と立ち隔て、枕を雙て打死す

強將の下に弱卒なく、相従ふ八千の士、主に劣らしと、命を毫毛よりも輕んし、義を萬斤の重きに置き、奮撃突進、目に餘る大軍を物ともせず、心を合せ、矢種の有ん限り、太刀の目釘、鎗

の穂先の絶る限り、荒れに荒てそ戦ひければ、六萬の賊軍終に支へず、開き靡きつ蛛蜘蛛の子を散すか如く右往左往に亂れ立つ。正に是れ

鐵心百鍊磨爲鋒 欲向中原殪虎狼

勝に乗りたる味方の軍兵得たりや應と罵りつ、足並亂して追つ驅れは、大將武光之を見て長追無用と呼ひ止め。軍を收めて引返し、荒爾と打ち笑み、筑水の急流に鱉りたる太刀を清むれは、血は奔湍に迸りて紅雪を吐く。詢國の劔は父祖の世より傳はりて、癸亥の年の功績は例も稀に菊池方、晩節最も香はしく、名は千載に隠れなく、阿蘇の高根と彌高く、立ち登るらん天つ日も、國に盡せる武士の眞心深き色添へて、赤き光りは千代ま

ても、四方の海邊に輝きて、四世の全節聞も中々芽出度けれ、詩あり歌ふて曰く

泗水吹添菊潭碧

又曰く

一家有政九州和

武士の情

夫れ武士は唯に猛きを以て能とせず、猛きか内に情を含むぞ芽出度けれ。茲に歐亞兩洲の北方に據り一億四千有餘萬、生靈の君主なる、露國皇帝ニコラス第二世は、彼の國中興の英主ピートル大帝より第十三代の君にして、仁慈の御心最と深く、令名夙に傳はり、宵衣旰食治を圖り、勵精勤勉民を導き、更に盟

亂源

群吏朋黨各
進所親、
招學姦姦抑
挫仁賢、背
公立私同位
相訕
亂根
強宗聚姦無
位而尊威無
不震、葛藟
相連種德立
恩、奪在位
權侵侮下民
內國譴詆、臣
蔽不言、
六賦
一臣爲大作
宮室鑿樹遊
觀倡樂

主となりて萬國平和會を蘭都へイグに催ふし、益々四海兄弟
一視同仁の主義をそ擴張らる。されば彼我兩國は云ふに及ば
ず、四海萬國之を見てあはれ此君を仰き其國を友とし、弓を袋
に太刀を鞘にし、民草の榮へ愈増す千代の春、五風十雨の瑞祥
を萬代かけて祝はんと、最と望を増す鏡、君の御徳を慕ひし
に、亂源塞かんとし、亂根斷たんとして終に得ず、群吏朋黨相
稱へて主明を蔽ひ、毀譽并興て宸聰を塞く、帝堯の廟謨心と違
ひ階前萬里五霧の中。露民則ち歌ふて曰く

國家尨大にして萬乘遠きに在り、黑雲都門を閑さして豺狼
九衢に滿つ、噫々此赤子を如何せん
又有禪師一休の詩

二民不事農
桑、任氣遊
俠犯歷法
禁、不從吏
教

請看凶徒大運籌 近臣左右妄優遊

蕙帳畫屏歌吹底 衆人日夜醉悠悠

殘荒の政累世患を流し、六賊七害交生し、宇内の環視を物と
もせず、剩さへ我正當の要求をも顧みず、倫を亂し化を破り、四
海の耳目を驚かしければ、我皇赫として茲に怒り終に膺懲
の軍をぞ發し給ふ

濛濛連檣百萬兵 雄心落々壓胡城

皇軍向ふ所前なく敗報頻々敵の都門に達し、注進彷彿ら櫛の
齒を曳くか如く、上下色を失ひ全都爲に震動す。中にも物の哀
れを極めしは、甲辰三月十日旅順港外の合戦に、我驅逐艦漣等
に渡り合ひ、舷々相摩し奮闘數刻、衆寡敵せずして、終に勇さ

一無智略權
謀而以三重
賞尊爵之
故、強勇輕
戰、僥倖
於外

六強宗侵奪
凌貧弱
七害

二有名無實
 出入異言、
 掩善揚惡、
 進退為巧
 三朴其身
 躬、惡其衣
 服、語無為、
 以求名、言
 無欲以求利
 四奇其冠帶
 偉其衣服、
 博聞辯辭虛
 論高議以為
 美容、窮居
 靜處而誹時
 俗
 五繼後荷
 得、以求官
 職果敢輕死
 以貪祿秩、
 不剛大爭、
 貪利而動、
 以
 說於人主
 六為彫文刻

ましき最後を遂けたる、敵艦「ステレグスチー」號の艦長ゼルグ
 ーフ大尉の夫人なり。當時夫人は病を養ふて露都に在り、敗報
 到るに及んで太く夫の安否を案しつゝ、身の痛つきも打ち忘
 れ、朝な夕なの物思ひ、忍ぶ情けの露筆、涙の乾く暇もなく物
 に狂はん計りなり。忽ち飛電あり、敗艦の乗員は多く漣等に救
 はれて、今は傷痕全く平愈すと。夫人之を聞き恰も死したる者
 に逢ふか如き心地して、佛國大使を経て夫の安否を知らんと
 需めしに、終に許されず。盲龜の浮木に離るゝ思ひして、よゝ
 と計りに泣きにけり。然れと斯くて止むべきに非ざれば屹と
 心を取り直し、遙かに我海軍の大臣に

北邊の一賤女恭しく書を貴大臣に寄す、哀れ其願事を許さ

鑿技巧華
 飾、以偽農
 事
 七偽方異技
 巫蠱左道、
 不祥之言幻
 惑其民

れよ、賤女は露國東洋艦隊驅逐艇隊の一隻なる「ステレグス
 チー」の艦長大尉セルグーフの妻女に侍るなり。傳へ聞く今
 年彌生十日旅順口の合戦に、「ステレグスチー」は貴國艦隊の
 爲に破られ、千尋の底に沈み、敢なき最後を遂げにしと。然れ
 と其乗員は情ある貴國艦隊に助けられ、傷者は佐世保なる
 海軍病院の最も手厚き治療を受け、今は盡く平愈すと。之を
 聞き侍へりしとき若しや夫も其内に在ん乎と、萬一の僥倖
 に一縷の望みを繋きつゝ、賤女の喜ひ如何計りそ、物に例へ
 ん様もなく、直ちに我同盟なる佛國大使を訪ふて、日本に夫
 の安否を尋ね給へと請ひ侍れと。大使は返信を得るの望な
 しとし、斯る問答は無用なり、思ひ止まり努々心を勞する勿

れと諭されて、賤女が請をぞ斥けらる。然れど大和の武士は仁義の心深く、恩愛の情を汲み、強きを拆き弱きを助くる眞情は、其公戦に勇なるに引替へて、捕虜の優遇と傷者に對する注意にて遍て知られ侍りけり。哀れ賤女が煩悶心勞を察せられ、所天の安否を知らしめ給へかし

と、佛文以て水莖の跡清く、物の見事に書綴り、心中限りなきの情をぞ訴へける、理りせめて憐れなり。我大臣は之を聞き、惻隱の情禁じ難く、夫人展轉の思を慰めんが爲め、遍く有司に命じて情報を求めしむ。内兩軍を極め、外友邦、然れど海事渺茫情定め難し。忽ち聞く虜中四名あり曰く裕、曰く納、曰く和、曰く披倫、四名共に大尉の部下にありて其負傷戦死の状を目撃す。

是に至りて事實判明蔽ふ可らず、轉々有司に教へて慇懃に報ぜしめ、終に臨んで眞情更に語を寄す

我及ぶ限りの手段を取り得る所の情報斯の如し、然れど海上の激戦は事情錯綜意外の出来ごとあるなきを保せず。良人或は貴國艦隊の救助する所となり、尙ほ此世に在すやも計り難し、貴國軍務當局にも御聞合せあらまほし。夫れはさて措き良人の率ひ給ひし「ステレグスチー」の艦員が我優勢なる艇隊に双向はれ、最後に至るまで奮戦力闘天晴れ大國艦隊の名譽を發揮せられしは、豫ての御薰陶左もこそと思ひやられて慕はしく、最終の望は如何あらんか知らねども、今貴女の斯の如き良偶を失はれしに對しては、茲に最も深

厚なる哀悼の情を表せざる得ざるなり

と、聞くならく、是れ東方敵國の信、九華帳中紅淚新なり。噫々
戰國の例とは云ひながら借老の契り半に破れ、春風桃李花開
くの朝、秋雨梧桐葉落るの夕、獨り夫人をして空閨を守らしむ、
閑花離亂終に情なく、騷去り空く留む處氏の涙賤の緒環繰り
返し昔を今に爲す由もなく

桃花春水生前夜 楊柳秋風憶故年

西幸吉氏の依頼に應じ作るものなり、記事は明治三十七年七月十一日の時事新報にあり

新體琵琶歌畢

明治三十八年十二月五日印刷
明治三十八年十二月九日發行

※※※※※
定價貳拾錢
※※※※※

著作權所有

著者

田尻稻次郎

發行者

平本正次

印刷者

天野耕一
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目
十二番地

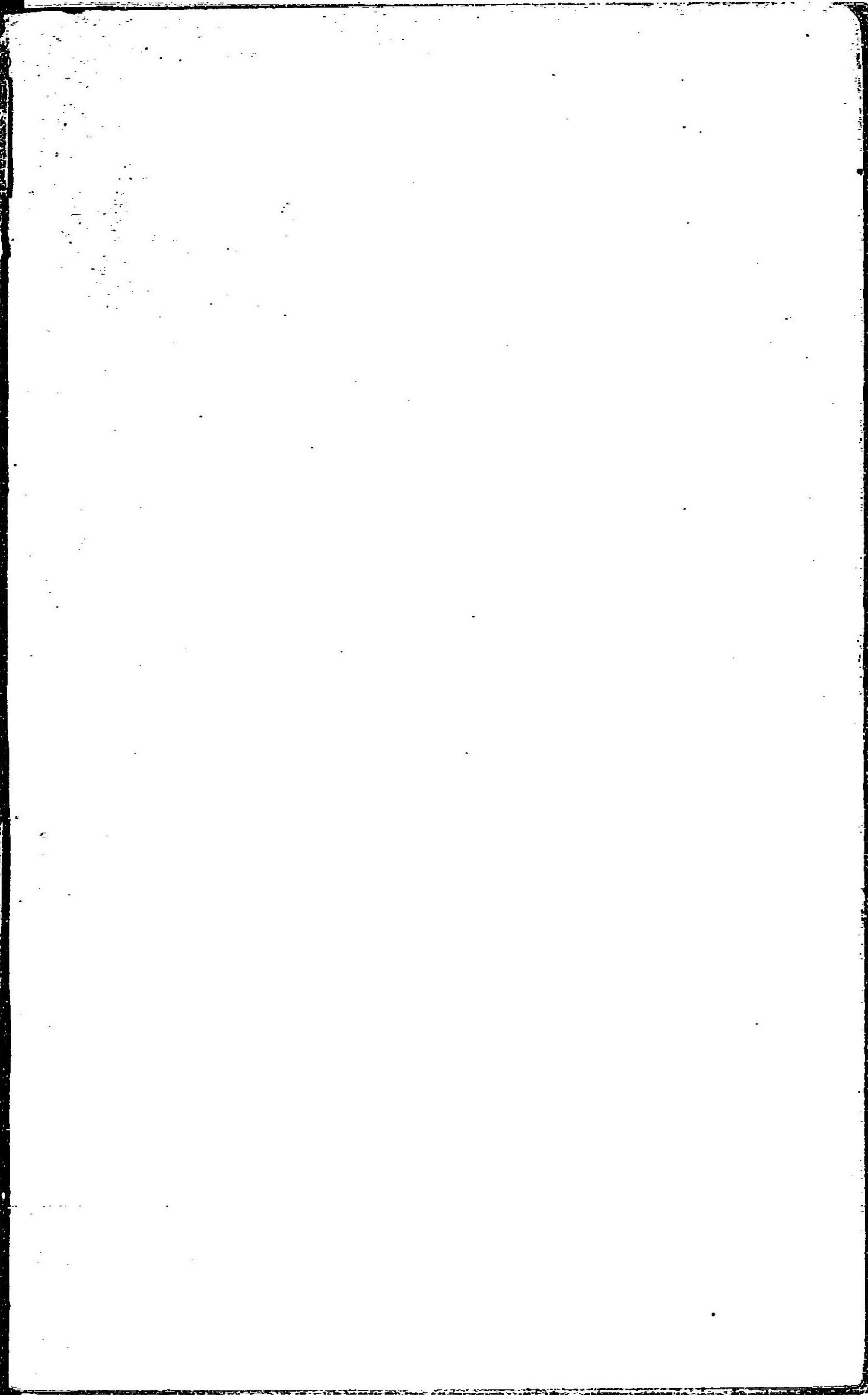
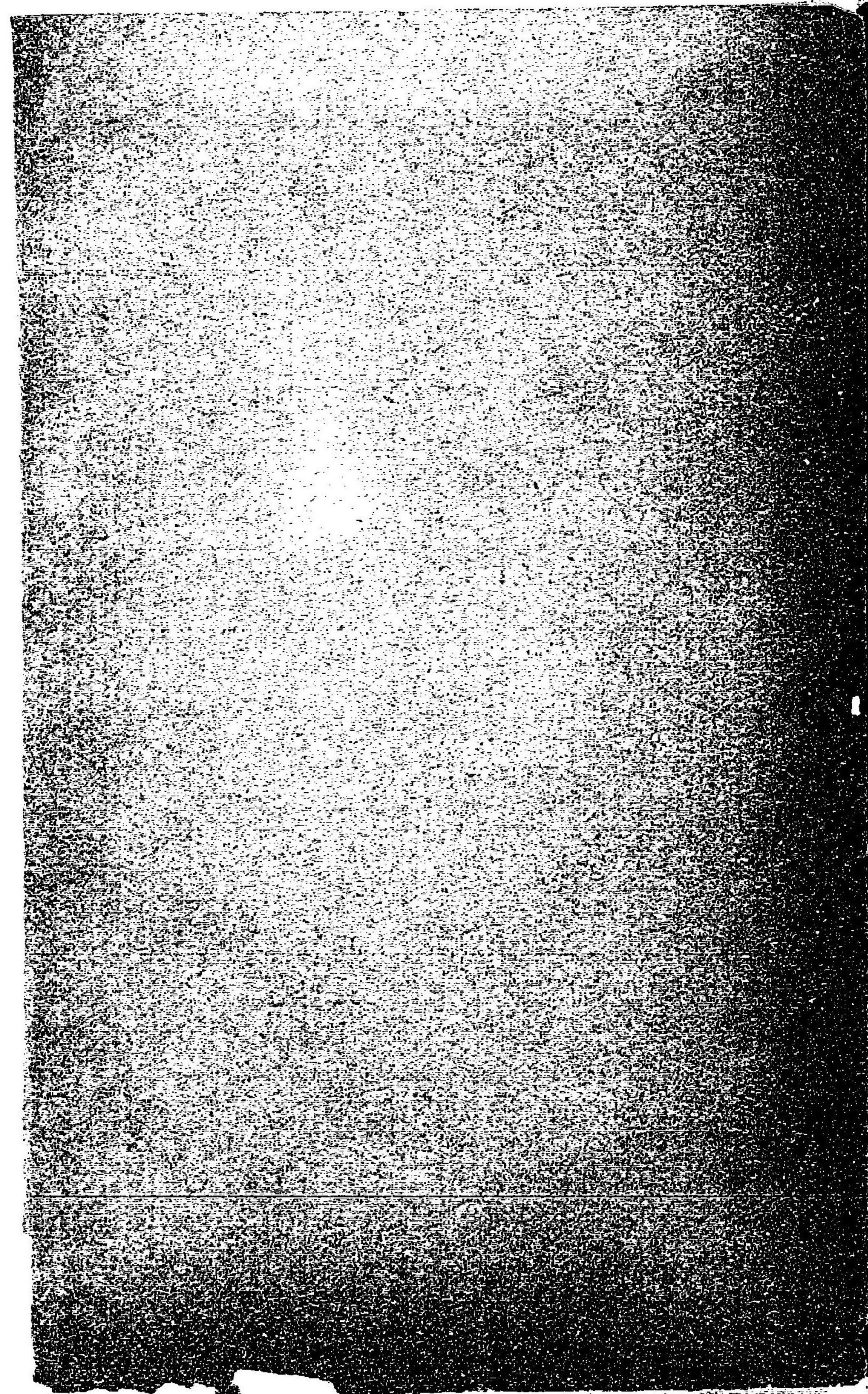
印刷所

秀英舎第一工場
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目
十二番地

發行所

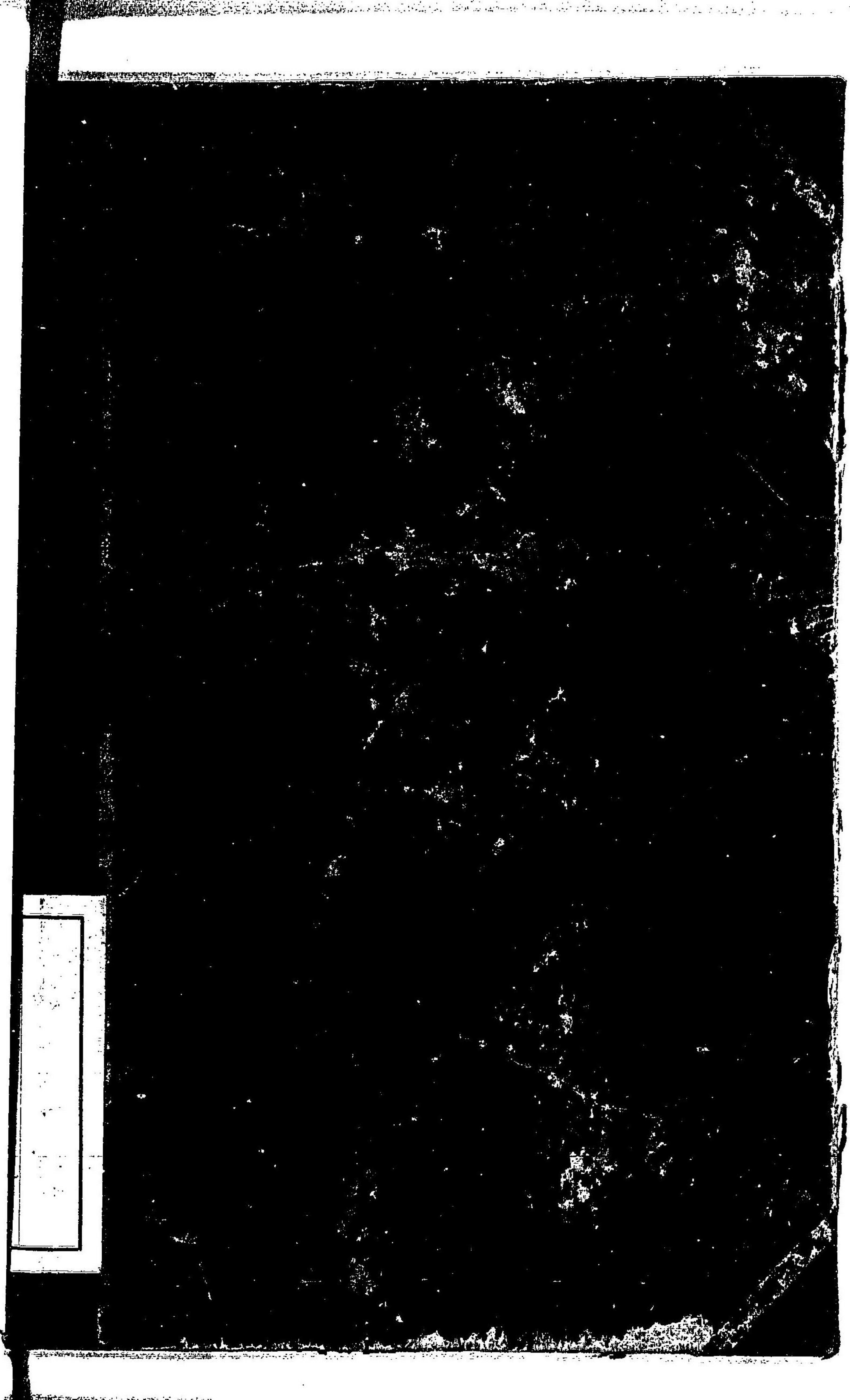
東京市神田區河邊茶の水角
電話本局二千九百九十九番

光融館



97

319



義無雙の楠公父子の場合に於ておや。弓矢取る身は義の爲めに、免れ難き事なれと、哀れは誰か忍ぶらん。三軍爲めに寂として聲なく、併居る將士鎧の袖を濕さぬ者ぞなかりける。されば異國人の詠詩にも

感極まりて呼吸熄み、思沈んでは吾を忘る

とかや、又後に至りて

取も憂し取ねば者の數ならめ

捨へきものは弓矢なりけり

と薬師寺左衛門尉が歌ひしも、是等の事をやおもひけん、嗚呼千載の下、永く臣子の龜鑑なれ、永く臣子の龜鑑なり

二段 生立併に勳功

扱ても正行は餘儀なき父の教訓に、惜々と河内に立歸へり、有し事ども母上と談り合ひ、互に袖をそ絞りける。斯る所に高氏は執拗くも、楠氏の遺族を謀らんと、正成兄弟の首級を求め態と禮を厚ふして、之を河内に送りければ、親族眷族は云ふに及ばず、將士從卒の末に至るまで、最と歎をますかがみ、面を擧ぐる者ぞなき。中にも正行は悲歎の情に堪へ兼て、靈前に額付き、幼心の一筋に、只管ら父を慕ひつゝ、腹搔き切らんと爲しにけり

茲に正成の後室、滋子の方と聞へしは、萬里小路宣房卿の息女にて、藤房卿の妹君に當られと、當時故ありて家臣上田兵庫に養はれ、正中二年春の比、楠氏にこそは嫁かれける。固より名